

大分県方言はどのように変わっていくのか

—ことばの変化と方言イメージとの関係を考える—

松田美香

A Study on Linguistic Change of Oita Dialect

— Considering the Relationship between Linguistic Change and Images of Dialects —

Mika MATSUDA

1. はじめに

昨年・今年と別府大学短期大学部の学生を対象に、いくつかの方言的表現の使用の有無や方言についての意識（以下、イメージとも記す）をアンケート調査した。この調査によって、大分県（広くは九州地方）に起こっている新しい方言現象の傾向をつかみ、また、同時に学生各自の持つ方言イメージもとらえようとした^(注1)。そして、ことばの変化の際に方言イメージが関わっているのか否か、また、その関わり方を具体的につかもうとした。

ところで、日本のある地域のある地点での言語変化を考えると、どのような理由による変化が考えられるだろうか。まず、方言学の世界では「方言集圏論」という考え方がある。それは、「都市から地方へ波紋状に新しいことばが広がる」という一つの強力な言語伝播パターンのことである。つまり、新しい物が都市から地方へもたらされ、やがて定着するように、ことばも中央都市から次第に遠くの地方へと伝わっていくわけである。このような伝播の成立するおもな理由としては、大都市の威信というものがあり、その威信によって新奇な物(ことば)への受け入れが積極的に行われるのである。しかし、ことばの変化の理由はこれだけではないであ

う。伝播のパターンがさまざまであることは、『日本言語地図』（国立国語研究所1966～1974）や『方言文法全国地図』（国立国語研究所1989～）などを見てもよく分かる。

結局のところ、さまざまな変化のパターンが生まれるのは、

- ① 都市の威力・威信（と同時にそれに対する地元の威力・威信）
- ② ことばの内部事情
- ③ その他の圧力（政治的な圧力による言葉の強制など）

という大まかに分けて3つの事情のせめぎ合いの結果が、言葉一つ一つによって違うからであると、筆者は考えている。都市の威力・威信が強いほど集圏的な伝播が起こりやすいのだが、ことばの内部事情の強い要請があっても言葉は変化する。多様な価値観が存在し、「地方の時代」などと言われる昨今では、変化の様相も複雑であることが予想される。

本稿では、アンケート調査の結果を提示しながら、大分県方言の変化動向を検証する。さらに、方言イメージをまとめて、これからの大分県方言のゆくえを探ろうとする。

ここでさらに付け加えれば、「方言イメージは、言語と文化をつなぐ典型的な中間項でもある。(中略)方言イメージは、方言の背景にある地域文化と深く関わるものである。」(井上史

雄1988) という言葉通り、この調査・研究は、「ことば」から「都市」や「地元」などの有りようを探る試みにもなっている。地域文化を読み解く一助になれば幸いに思う次第である。

2. 大分県方言の変化動向について ('97・'98アンケート結果から)

2-1. アンケート調査について

アンケートは、1997(平成9)年9月と翌1998(平成10)年4月の2回行った。対象者は、別府大学短期大学部の学生である。所属学科は、生活文化科、商経科、英語科、食物栄養科('97のみ)、初等教育科('98のみ)の短期大学部全学科にわたった。

有効アンケート回答人数数は349人だった。以下に、回答者の出身地(3~13歳までの、「言語形成期」を含む8年以上を過ごした居住地)を大分県内と県外に分けて記す。

(1) 大分県内各地…244(人)

大分市146, 別府市39, 中津市5, 宇佐市6, 豊後高田市2, 杵築市10, 臼杵市2, 津久見市1, 佐伯市1, 竹田市3, 山香町1, 日出町3, 国東町2, 姫島村1, 安心院町1, 玖珠町2, 九重町1, 久住町1, 湯布院町1, 挾間町2, 直入町2, 緒方町1, 野津原町1, 千歳村2, 三重町1, 野津町1, 宇日町3, 蒲江町4, 佐賀関町1

(2) 大分県外各地…105(人)

沖縄県12, 鹿児島県7, 宮崎県12, 熊本県14, 長崎県8, 佐賀県2, 福岡県19, 高知県1, 愛媛県2, 香川県1, 山口県2, 広島県2, 岡山県1, 兵庫県2, 奈良県1, 和歌山県1, 大阪府4, 京都府3, 愛知県2, 静岡県3, 山梨県1, 富山県1, 新潟県1, 神奈川県1, 東京都1, 宮城県1

性別比 285(女性) : 64(男性)

… およそ4 : 1

なお、アンケートの方法は、筆者が用意した質問票に記号で回答してもらうものである。

アンケート内容は、筆者が実生活において気付いた大分方言に顕著な変化を、後述するように文献でも調べ、調査項目として選び出した。方言イメージについても、筆者の担当する「地域文化論」などで飛び交った、各地域や方言に対する意見にヒントを得て、過去に行われた方言意識の調査を参考に、複数回答式の質問票(調査票)を作成して調査した。

以下に、本稿の大きな章立てを列挙する。

- 2-2-1. 断定辞ジャーヤへの変化
- 2-2-4. 動詞活用のラ行五段化傾向
- 2-2-3. 「~(ラ)てください」敬語の頻用
- 3. 方言イメージ・アンケート結果
- 4. 考察

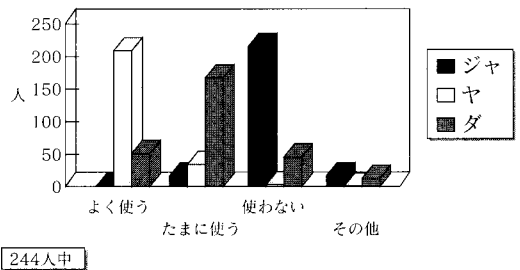


図1 断定辞ジャーヤへの変化 (大分県内出身者)

2-2. 調査結果

2-2-1. 断定辞ジャーヤへの変化

断定の助動詞の形式について、「昨日は雨だった。」で調査した。その結果、県内出身者208人(85.2%)が「雨ヤッタ」と「ヤ」を「よく使う」と答えた。

『日本の方言』(平山輝男1968)では、岡山県、広島県、山口県の大部分、香川県を除く四国全域、大分県全域を含む九州ほぼ全域が「ジャ」の使用地域と報告されている。つまり30年前は「雨ジャッタ」が盛んな地域だったわけである。今回その「ジャ」は、「よく使う」が県内では国東町出身の男性1人(1998年4月当時18歳)だけだった。他に「たまに使う」が17人いた。県内出身者210人(約86%)が

ージが深く関与していると思われる^(註2)。

2-2-2. 動詞活用のラ行五段化傾向

学生のことばを聞いていると、「寝ない」→ネラン、「見ない」→ミラン、「出ない」→デランなどのように、否定の「ない」にあたる「ン」の前にラが挿入し、「ラン」として実現する傾向が顕著である。大分県では、糸井（1983）などで、上述のような2拍一段活用動詞の否定形にラが挿入される現象が報告されている。しかし、今回、「起きない」はオキン（オケン）、「落ちない」はオチン（オテン）となるはずの多拍の一段動詞まで、オキラン、オチランとなる回答がいくつか見られた。この傾向について、分析・研究してみた。

この傾向は、現在広く日本各地で報告されている（小林1995他）。「ラン」となるのは、一段（古くは二段）活用動詞が否定形になる時に、実現形態が不安定であるため、より安定する形への変化として広まったものと考えられる。ネン（寝ない）、ミン（見ない）、デン（出ない）などのように拍数が少なく、また最後が撥音になると、それだけでは不安定なのである。そのため、拍数を増やして安定をはかろうとしたわけである。そして、増やす拍数および形式は、ワカラン（分からない）やシラン（知らない）などからの類推で「ラ」が選ばれ、前述のネラン、ミラン、デランのようになったと考えられる。このような「類推」は、動詞の活用全体を五段活用1本にしようとする、文法体系整備化の欲求によるものとも言える。したがって、次第に2拍以上の、オキン（オケン）やオチン（オテン）にも及んで、オキラン、オチランとなったものと考えられる^(註3)。

この変化は、小林隆（1995）によれば、

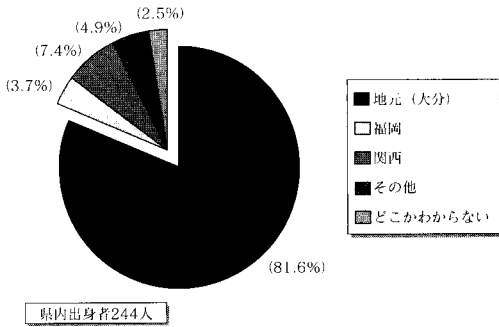


図2 この言葉だと思いか (断定辞「ヤ」)

「ジャを使わない」と答えている。

こういった「ジャ」の衰退の中ながら、そのうち126人は「ジャは大分のことば」という意識を持っている。おそらく彼らの親世代以上では、まだ「ジャ」が使われているのであろう。「ヤ」がいかに急激に青年層に広まったかがわかる。「ヤは大分のことば」という意識の人も199人いる(図2)。平山(1968)の時点では、「ヤ」の分布は近畿地方を中心で、他地域ではわずかな分布に過ぎなかった。九州では、福岡県北部と佐賀県北東部のみであった。大分県には、福岡県から入ってきたものだろうが、近畿地方、特に関西地域からの直接の影響も大きいと思われる(図2の「関西」を参照)。

「ヤ」は、わずか30年ですっかり大分のことばになっている。他方、「ジャ」は古い言い方として衰退している。

「ダ」の県内出身者の結果は、「よく使う」40人(16.4%)、「たまに使う」156人(63.9%)、「使わない」35人(14.3%)だった。「ヤ」に比べれば「よそいきのことば」というところだろう。全国共通語である「ダ」が浸透せず、「ヤ」が定着している。この新しい傾向は、県内出身者(大分方言話者)の方言イメ

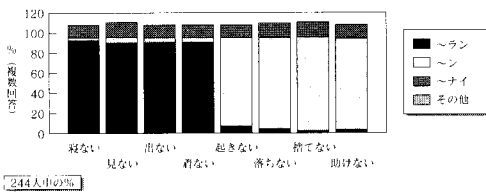


図3 動詞活用のラ行5段化傾向(大分県内出身者)

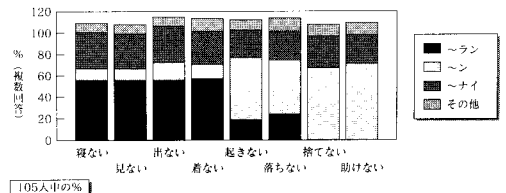


図4 動詞活用のラ行5段化傾向(県外出身者)

	大分県(244人)	熊本県(14人)	長崎県(8人)	宮崎県(12人)	佐賀県(2人)	福岡県(19人)	鹿児島県(7人)	沖縄県(12人)
寝ラン	230 (94.2)	13 (92.9)	6 (75.0)	10 (83.3)	2 (100.0)	16 (84.2)	2 (28.6)	0 (0.0)
着ラン	227 (93.0)	13 (92.9)	5 (62.5)	10 (83.3)	2 (100.0)	15 (78.9)	3 (42.9)	0 (0.0)
出ラン	227 (93.0)	13 (92.9)	5 (62.5)	8 (66.6)	2 (100.0)	16 (84.2)	4 (57.1)	1 (8.3)
見ラン	225 (92.2)	13 (92.9)	7 (87.5)	10 (83.3)	2 (100.0)	16 (84.2)	2 (28.6)	1 (8.3)
起きラン	12 (4.9)	6 (42.9)	1 (12.5)	3 (37.5)	1 (50.0)	3 (15.8)	1 (14.3)	0 (0.0)
落ちラン	8 (3.3)	11 (78.6)	5 (62.5)	1 (8.3)	1 (50.0)	3 (15.8)	2 (28.6)	1 (8.3)
捨てラン	2 (0.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
助けラン	3 (1.2)	1 (7.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)

() 内は%

表1 動詞活用のラ行五段化傾向(出身県別使用者)

『逆集圏論』的分布』であるとされており、筆者もおおむね同意見である。この場合、否定形「ない」が「ン」になる地域の、大都市でもない、かといって辺境でもないある地域の活用形からラ行五段化が始まり、先述の動詞活用の一本化が背景にあるために、それが周辺へと徐々に伝播されている過程にあるようだ。

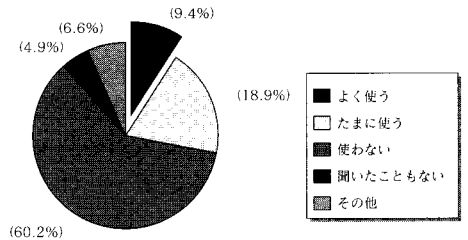
拍数が多くなるとこの現象は激減する。繰り返すことになるが、この変化は2拍ゆえの不安定さに端を発している。しかし、県外出身者にはオキラン、オチランの回答が比較的多かった。県内出身者244人中15人(約6.1%)に対し、県外出身者は105人中23人(約21.9%)が、多拍一段動詞におけるラ行五段化傾向にあることがわかる(図4)。もうすこし詳しく調べると、オキラン(38人中28人)、オチラン(38人中29人)、ステラン(38人中2人)、タスケラン(38人中4人)で、オキランとオチランの使用者が多かった(註4)。徐々に多拍一段動詞にもこの変化が及んでいる様子がわかる。この変化形を回答した県外出身者には、はっきりとした地域性が見られた(表1)。変化形を回答した県が、調査した限りでは沖縄・九州に限られており、中国・近畿関東・東北地方に無かった。ただし、今回の調査では、県外出身者の都府県別人数を揃えていないため、ここでの割合がその県全体の割合と直接結びつかないことをお断りしておく。

今回は、否定形のみを調査した(註5)。しかし、最も五段化しにくい連用形も、筆者が直接聞いただけで、1997年11月に宇佐市出身者から「ミリタガル(見たがる)」, 1998年10月に

「ミリません(見ません)」(大分市教育委員会職員)がある。「見る」は、一部でかなり早くから五段化が進んでいるのかもしれない。この傾向について、今後もより詳細な調査を続けていく必要がある。

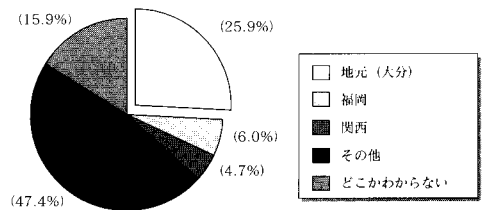
2-2-3. 「～(ラ)てください」敬語の頻用

見ラてください, 来ラてください, ～さてください…などのように、動詞の未然形に助動詞(ラ)レルを付けて軽い尊敬の意を表す。これを今「ラレル敬語」と呼ぶ。「ラレル敬語」



県内出身者244人中

図5 「～(ラ)てください」敬語 (持ってこられてください)



県内出身者232人中

図6 どこかの言葉だと思うか (「～(ラ)てください」敬語)

は、簡便敬語である。「ご覧になる」や「いらっしゃる」のような別語を使わずに済むので、大分県内の店員や看護婦などが盛んに使用している。日高貢一郎(1996)に詳しい。大分県方言は比較的敬語表現に乏しいという理由もあって、接客用の軽い敬語として、近年盛んに用いられるようになってきているようだ。

結果を見ると(数語について調査したが、代表として「持って来ラレてください」の結果を用いる)、調査対象者18~22歳の短大生ということもあってか、使用者は「よく使う」「たまに使う」合わせて69人(28%)ほどである。しかし、どこの言葉かという問いに60人(25.9%)が地元の大分をあげている。

この傾向は、実は可能表現(～できる)の見レル、着レル、寝レルといったいわゆる「ラ抜き言葉」とも関係している。ラ抜きの言葉にすることによって、可能表現を受け身・尊敬形(～ラレル)などと区別できることになり、尊敬形の「ラレル」がより使いやすくなって使用が促進されているとも言える。藤原与一(1978)によれば、20年前(当時)に、「～レル・ラレル(あるいはその音変化形)」で尊敬表現を行っていたのは、富山県域、中国地方ほぼ全域、九州では鹿児島県全域と熊本県・宮崎県・福岡県の一部だけであった。当時、この「～レル・ラレル」での尊敬表現は、「老人の古めかしい言い方とされる」とあることから、大

分県では一度は廃れたと考えられる。ところが、その簡便さゆえにもう一度息を吹き返したのであろう。それも大分県内で単独に再発生したと考えるよりは、都市の威信によって広まろうとしている可能性が高い。それは、「どこの言葉だと思ふか」(図6)の回答に見られるように、約4分の1にあたる60人が「地元大分のことば」と回答しているものの、「福岡」と「関西」を合わせると10.7%(25人)、「その他」では「東京・関東」が20人、「全国共通語・標準語」が17人、「丁寧に言うときの言葉」が2人である。約4分の1は、大分よりも文化・経済的に大きな都市や全国で通用する敬語として、ラレル敬語をとらえていることが分かる^(註6)。

このラレル敬語、特に「～(ラ)レてください」の形は、現在、九州地方を中心に、山口県、岡山県、高知県で使用されている(日高貢一郎1996)。尊敬形にするのが簡単で、聞く方もわかりやすいという利点があり、使用者は広まる傾向にあるようだ。今後の展開に注目したい。

3. 方言イメージ・アンケート('97,'98)結果

3-1. 大分県内出身者の言語意識アンケート('97,'98)結果

3-1-1. 九州地方の言語(〇〇弁)のイメージ

<図7・8参照>

大分県内出身者

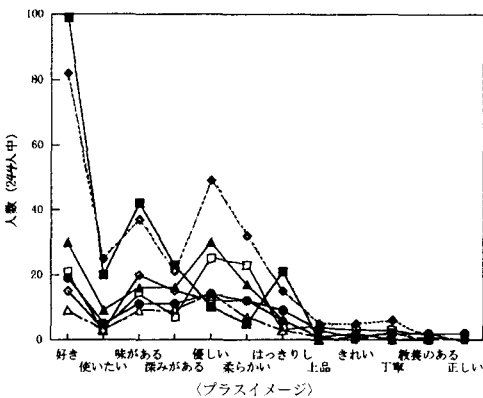


図7 九州地方方言のイメージ (+)

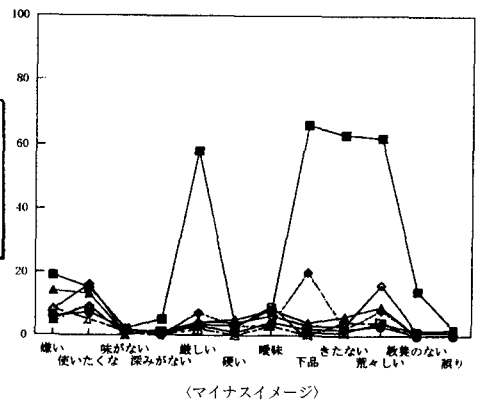


図8 九州地方方言のイメージ (-)

大分県、福岡県、熊本県、宮崎県、鹿児島県、佐賀県、長崎県で話されている言語をそれぞれ〇〇(県)弁とし、それに対してどのようなイメージを持っているか、26の選択肢の中からいくつでも選んでもらった。それぞれの県の中でも、さらに△△弁などと細かく分かれていることもあるが、九州だけでも相当な数になることが予想される。各県の言語に対する意識を尋ねるだけでも、まとまった意識傾向が探れると見当をつけた。

図7はプラスのイメージ、図8はマイナスのイメージをまとめたものである。選択肢については、井上史雄(1988)や陣内正敬(1996a)を参考にした。グラフにする際に、プラス・マイナス選択肢に分け、プラス要素を「好き」「使いたい」「味がある」「深みがある」「優しい」「柔らかい」「はっきりしている」「上品」「きれい」「丁寧」「教養のある」「正しい」と並べ、マイナス要素はこれに対応する「嫌い」「使いたくない」「味がない」「深みがない」「厳しい」「硬い」「曖昧」「下品」「きたない」「荒々しい」「教養のない」「誤り」と並べた(図7・8)。並べ方には悩んだが、左から右に向かって、「主観的(感情的)」から「社会規範的」へと、ことばの意味合いを考慮して並べてみた。

(1) 大分弁について —好きだけれど、下品・きたない・荒々しい—

プラス・イメージでは、左から「好き」が99人、「味がある」が42人、「深みがある」23人、「はっきりしている」21人が目立つ。他に「使いたい」20人、「優しい」10人、「柔らかい」5人であった。一方、マイナス・イメージでは、「下品」66人、「きたない」63人、「荒々しい」62人、「厳しい」58人が目立つ。「嫌い」は19人、「使いたくない」は15人と、「好き」や「使いたい」よりかなり下回っている(図7・8を参照)。

図7と図8を見比べると、プラス・イメージでは左側が高くなっているのに対して、マイナス・イメージでは右側が高い。つまり、感情としては好意的で評価が高いが、客観的には品性

がなく、ぞんざいな言葉・言葉遣いだと思う人が多いという集計結果である。

(2) 福岡弁について —プラス・イメージが多く、最も嫌われていない言葉—

「好き」が82人で、九州では地元大分弁の次に多い。それに対して「嫌い」が5人と、調べた中で最も嫌いな人数が少なかった。「優しい」49人、「味がある」37人、「柔らかい」32人、「深みがある」21人、「はっきりしている」15人と、全体的にプラス・イメージの回答数が多い。反対にマイナス・イメージは「下品」20人が多くだけである。福岡弁の代表格である博多弁は、九州地域のCM等メディアで広く知られている。福岡(特に博多)は九州一の大都市・大消費地であり、大分県の人々から注目されている都市である。それが福岡の言葉への好意となって現れているのだろう。しかし、優しさや柔らかさはそれだけの理由では感じられないものである。福岡弁の言い切りの形式として「ト」や「タイ」、「ハイ」、「シャイ」が目立つ。しかも尻上がりのイントネーションが多いので、語尾に強さを感じない方言なのである。それに比べて、大分弁は尻下がりのイントネーションになることが多く、言い切りの形式は「ナ」「カ」「チ」なので、聞き比べてみると語気が強い感じがする。このような比較から、福岡弁には、優しさや柔らかさのイメージが集中したと考える。

(3) 熊本弁・宮崎弁・鹿児島弁・佐賀弁・長崎弁について —反応が少ない—

この5県については、「好きでも嫌いでもない」、「何とも言えない」を選んだ人が多く、約50%の人が上述の2つの選択肢を選ぶか、あるいは無回答であった。よって、図7・8はそれ以外の回答をもとに作成しており、約半数の人のイメージということになる。

熊本弁の「好き」30人、「優しい」30人、宮崎弁の「優しい」25人、「柔らかい」23人、鹿児島弁の「味がある」20人などが目立つ程度であって、多数意見が無いのが特徴である。

特に、「使いたい」がこの九州5県でいずれも9人以下であったこと、「使いたくない」がどの県も「使いたい」の数を上回っていることは注目される。マイナス・イメージの中では、熊本弁(8人)・宮崎弁(9人)がともに「曖昧」で多く、鹿児島弁は「荒々しい」16人、佐賀弁は「嫌い」8人、長崎弁は「使いたくない」7人が最も多い回答だった。

回答数(複数回答)の少なさと、これという理由も見あたらないのに「使いたくない」を選ぶ心理。大分県出身者にとって福岡以外の九州各県は、少なくとも言葉においては注目されていない存在である、ということは確かなようである。

3-1-2. 巨大都市(関西・東京)の言語についてのイメージ<図9・10参照>

(1) 関西弁について

—最も使いたい言葉—

図9・10には、参考のために福岡弁も表示してある。関西弁で目立つのは、「好き」136人、「味がある」86人、「はっきりしている」65人、「使いたい」47人である。他に「深みがある」34人、「丁寧」11人にも回答が集まった。

ところで、回答者のうちの60人に、関西弁といえどこの地域で話されている言葉と思うかを尋ねた。選択肢として関西地域2府4県と、

その他として空欄に自由に書き込めるようにした(複数回答)。その結果は、大阪59人(98.3%)、京都22人(36.7%)、兵庫27人(45%)、奈良19人(31.7%)、滋賀7人(11.7%)、三重3人(5%)、和歌山2人(3.3%)だった。この結果から見る限り、関西弁を「大阪を中心とする京阪神地域で話されている言葉」と考えているが大半を占める。

さて、大阪のことばが中心と考えられている関西弁のイメージは、大分県出身者にとって、最も好感度が高いものであった。しかし、マイナス・イメージにも回答数も多く、「厳しい」84人、「荒々しい」65人、「下品」31人などが目立つ。

総合してみれば、これまでも言われているように、吉本興業をはじめとする「お笑い」のイメージが強く、関西弁に対する好感の原因になっていると思われる。「味がある」とはこの場合、「面白い」の意味を含み、こけ下ろしや突っ込みなど、掛け合いの激しさを「厳しい」「荒々しい」「下品」としながらも、「お笑い」を見聞きして溜飲を下げている学生たちは、「お笑い」の関西弁に憧れ、自らも使いたいと思っているのであろう。このように考えるならば、この結果が上手く説明できる。大分県内出身者の関西弁に対する関心は非常に高い。全体の回答(書き込み)数が関西弁は624で大分(地元)弁の540よりも多い。ちなみに、福岡弁は335、最低は佐賀弁の84であった。

大分県出身者

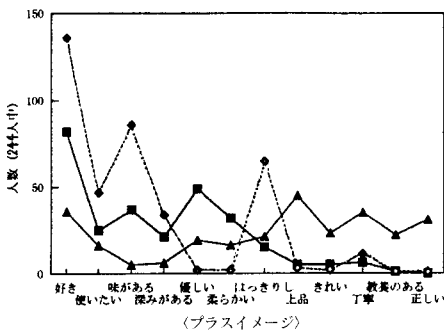


図9 都市言語のイメージ (+)

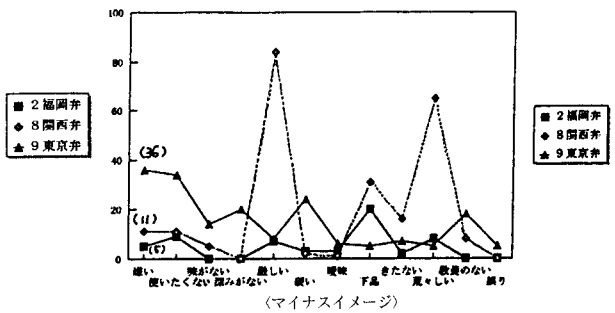


図10 都市言語のイメージ (-)

(2) 東京弁について

—好きと嫌いが相半ばする—

東京弁とはどの地域で話されている言語のことかということも、本調査の後で60人に調査したところ、「漠然とした東京都全体」が36人(60%)、「いわゆる下町」が17人(28.3%)、「いわゆる山の手」が7人(11.7%)だった。意見が割れていることがわかったが、それも含めて「東京弁」のイメージととらえることにしたい。

「好き」と「嫌い」が同数の36人である。「嫌い」の方は調査した〇〇弁中で最高点である。「使いたくない」34人、「硬い」24人、「深みがない」20人、「教養のない」18人などがマイナスイメージの主だったものである。「上品」45人、「丁寧」35人、「正しい」31人、「きれい」23人、「教養のある」22人、「はっきりしている」21人などのプラス・イメージが多いことと考え合わせると、共通語に近くて品性もあるが、親しみにくい、冷たい感じがするということであろうか。「教養がある」と「ない」が両極に分かれたのは、対象としている言語をそれぞれ「山の手言葉」としたか、「下町言葉」にしたかによるものではないかと推測する。

これまでの中で、唯一プラス・イメージのグラフ右半分(社会規範性)が高いところが特徴である。

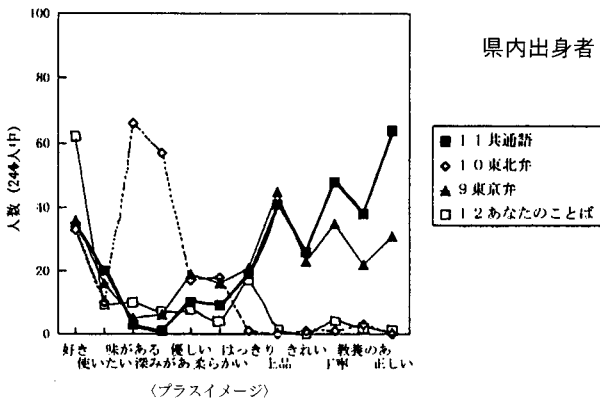


図11・その他 (+)

3-1-3. その他 <図11・12参照>

(1) 東北弁について

—深みがあるが、実用性がない—

プラス・イメージの中の「味がある」66人と「深みがある」57人が最も強いイメージであるようだ。「好き」33人も「嫌い」16人の倍以上であり、好感度は高い。しかし、プラス・イメージの右半分は極端に少ない。感情的には好意がもてるが、社会規範的には評価しにくいというのが、東北弁のイメージと言えそうだ。「使いたい」10人に対して、「使いたくない」50人の理由は、マイナス・イメージの「曖昧」18人、「きたない」12人、「下品」10人などだろうか。特に「はっきりしている」が1人のみで、他の地域の言葉と比べて極端に少ない。このことと考え合わせると、東北弁を使いたいとは思わない最大の理由は、「曖昧ではっきりしていない」ということであろう。これが大きな欠点となって、東北弁の実用的イメージが損なわれていると考える。

(2) 共通語について

—正しくて教養ある言葉だけど…—

最も多かったのが「正しい」64人で、「丁寧」48人、「上品」41人、「教養のある」38人と社会規範的な評価が高い。当然のことながら、(全国)共通語が話される場面がフォーマル(正式)の場であることが圧倒的に多いことから、このようなイメージが引き出されるのであろう。しかし、「好き」34人に対して「嫌い」

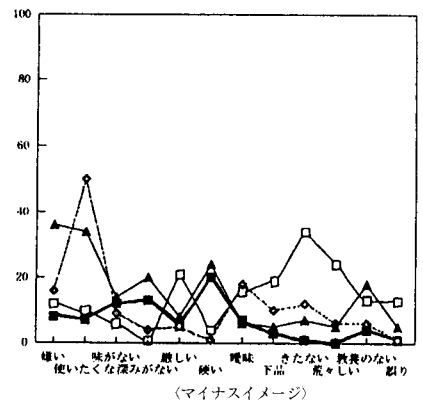


図12・その他 (-)

8人、「使いたい」20人に対して「使いたくない」7人など、多少なりとも共通語に対する拒否反応もうかがえる。これが若者特有の反抗精神から来るものなのかどうかは、さらに何らかの調査が必要である。

大分弁をはじめとして各地の言語と比べてみると、共通語に対しての好感度は決して高くない。好き嫌いの枠の中に入らないもの、ととらえられているとも考えられるが、「硬い」20人、「深みがない」13人、「味がない」12人などが、好感の持てない理由であろうか。回答数の偏りを見ると、大分県内出身者の多くは、自らの日常使用言語としては共通語を求めているようである、ということが言えそうだ。

(3) あなたのことば —はつきりしている好きだが、正しくない—

プラス・イメージとマイナス・イメージを比べてみると、プラスは左上がり、マイナスは右上がりである。「好き」62人が多く、「はつきりしている」17人、「味がある」10人、「使いたい（使い続けたいの意に解釈したのか?）」9人、「優しい」8人などが目立つ。しかし、「きれい」0人、「正しい」1人、「上品」1人、「教養ある」2人などの少なさ、またそれに対応する「きたない」34人、「下品」19人、「教養のない」13人、「誤り」13人などに注目すると、社会規範的には評価できない、品位が無いというイメージが存在することも指摘できる。

自らのことばを「好き」と評価する人が多い（「好き」62人、「嫌い」12人）ということは、喜ばしいことである。その理由については、今回のデータからはあまりはつきりした答えが出そうにはない。彼らが自分自身のことばについて、なかなか客観視できないということであろうか。強いて言えば、「はつきりしている」17人、「味がある」10人、「深みがある」7人という数から、本音が言いやすい、面白さや、細かなニュアンスや、歴史といったものを感じることが出来るという点に、好感を持っているのではないかという推理が出来る。特に「はつき

りしている」は、裏を返せば「荒々しい」（24人）、「厳しい」（21人）、というイメージに結びつく。この結果は、3-1-1の（1）大分弁のものとはほぼ同傾向だが、「下品」「厳しい」「荒々しい」「きたない」はどれも半数以下に減っている。一方で、「好き」「味がある」も大きく減っている（「味がある」は42人→10人）。自らのことばは大分弁の欠点が減ったものの、魅力も失ってしまったようである。

実際のところ、この「あなたのことば」の回答数は298と、大分弁の540と比べれば少ない。先述のように、身近かであっても自分自身のことばは無意識につかっているものであり、客観的に回答するのは難しかったのであろう。今回のデータからは、自らのことばに好意を持っている人が4分1強いることがわかった。今後、言語の変化の一方で自らのことばについての意識がどう変わっていくかも、見ていきたいと思う。

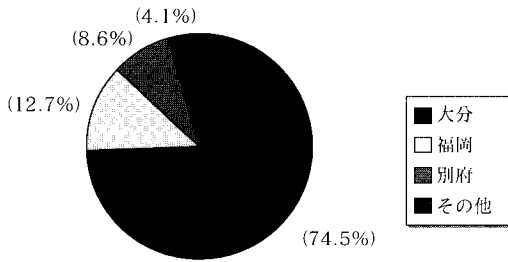
4. 考察

4-1. 大分県出身者にとっての都市はどこか —都市の威力・威信と方言イメージ—

〈図13・14参照〉

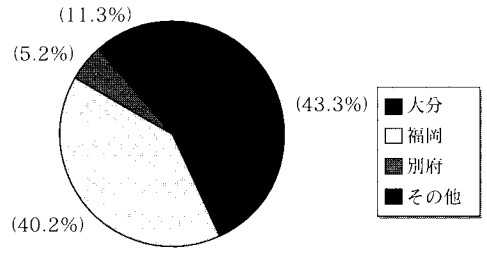
ここではまず、方言イメージと「都市」志向との相関について考えてみたい。学生に「スーツや着物を買う所（市町村）」と「演劇やコンサートを観に行く所（市町村）」という質問に答えてもらった。大分県出身（居住）者の、前者では買い物、後者では文化のそれぞれの中心地を尋ね、情報発信地としての彼らの「都市」はどこかを探ったわけである。

結果は、「スーツや着物を買う所」では、大分199人（81.6%）、福岡（天神という回答が多い）34人（13.9%）、別府23人（9.4%）だった。その他の地域は、大阪3人、珍珠2人、熊本1人、広島1人、宇佐1人、中津1人、都会1人、全国1人だった。ちなみに珍珠はその土地の出身者、宇佐は安心院出身者、中津は宇佐出身者であった。熊本は、数年熊本に居住歴があった。



県内出身者244人

図13 買い物・文化圏 (スーツや着物を買う所)



県内出身者244人

図14 買い物・文化圏 (演劇・コンサートを観に行く所)

次に「演劇」やコンサートを観に行く所(市町村)は、大分市126人(52.5%)だが、福岡市(博多区)も117人(48.0%)で、約半数が福岡まで行くと回答している。その他の地域は、東京3人、熊本3人、大阪2人、竹田2人、宇佐2人、広島1人、長崎1人、中津1人、杵築1人、安心院1人、宇目1人、日田1人、玖珠1人だった。東京3人のうち1人は5歳まで東京に居住歴がある(女)。しかし、あとの2人は大分市で生まれ育った人である。広島1人が5歳まで北海道に居住歴がある。他は県内に居住歴をもつ人のみ。

以上の結果のように、大分県出身者にとっての都市は確かに大分市(市街地)であると言って良いが、特に文化の面では福岡市博多区の影響が大きいことも推測される。また、少数ながら遠方大阪や東京へ出向く人もいる。これはやはり、大阪や東京に得たいと思うような「物」や「情報(文化)」が存在するからであろう。こうしてみると、大分県出身者にとっての「大消費地であり文化の面でも中心地といえる地域」が浮かび上がってくる。つまり、この回答に表れているのが彼らにとっての「都市」なのである。彼らが社会人であれば、福岡・大阪・東京の人数がもっと増えることが予想される。

3-1-1.や3-1-2.で述べたように、福岡・大阪のことばに対する興味や好意の多きは、これらの都市への興味や好意の反映であると言えよう。一方、東京のことばに対する好悪相半ばする結果は、共通語のイメージとの相関を感じさ

せる。この東京(のことば)に対する複雑な意識は、大分県出身者の言語意識の特徴とも言えるだろう。つまり、大阪-福岡-大分の伝達経路は許容しても、東京(=大阪-福岡)-大分という伝達経路は素直には許容できないといった意識と言えようか。東京対大阪の文化対立がよく取り沙汰されることから、単純に考えれば、大阪の文化の中の「東京嫌い」の部分も影響を受けているということになる。このあたりはもっと掘り下げてみたいところである。

学生たちが物や文化として影響を受けやすい都市は、まず大分市、次に福岡、その次に大阪であり、この結果はその地域のことばへの関心の高さ、特に好意となって表れていることがわかった。すなわち、この地域で話されていることばは、彼らが「取り入れたい」「使ってみたい」と思う、魅力的なことばであると言える。物や楽しみを得るだけでなく、彼らはその土地のことばをも持ち帰り、自らの中に取り込もうとする。これは、都市の威信のなせる技であろう。

言語イメージの面から言えば、将来の大分県方言は、まず県内の各地域のことばが大分市のことばに近づき、次に福岡(博多)弁に近づき、あるいはまた関西(大阪)弁に近づくというように変化すると予想される。日本全体の共通語化も考えれば、生粋の大分県内の各方言(△△弁)は消滅し、大分弁と博多弁と関西弁と共通語のモザイク状のことばを使うようになるということである。これ以上の詳しい予想はなかな

かできないものだが、実際にもうこの動きは始まっている。それが、ジャからヤへの変化であり、ラレル敬語の使用である。

断定辞ヤについては、ジャの子音弱化の変化形として近畿地方から伝播した変化であり、大分では急速にヤのみになるような勢いで広まっている。これは単に地を這う伝播だけでない。テレビ・ラジオ・印刷物等のメディアから大量に関西弁がもたらされ、大分県の若者が関西弁に対して相当な好意を持っていることによると思われる。

ラレル敬語は、もともと日本語にあった助動詞(ラ)レルを添加して敬意を表すものであり、過去の分布からみると、大分へは福岡・宮崎・熊本などの隣接する地域から入ってきた可能性が高い。しかし、「どこの言葉だと思うか」(図6)の回答を見ると、「福岡」14人、「関西」11人、「東京・関東」20人、「全国共通語・標準語」17人と、大都市あるいは全国共通語から伝播した言葉遣いだと考える人が少なからず存在する。これらの変化は方言イメージの力、すなわち都市の威信によるものだと言える。「これは都市のことばである」と思うことによって、人々はやすやすと新しいことばを受け入れ、盛んに使うのである。後述するように、受け入れる理由はこれだけではないが、好ましい方言に近づきたいと思う気持ち、つまり方言イメージの力によってことばの変化が起きることも、また、事実である。

4-2. ことばの内部事情による変化と方言イメージとの関係

もうひとつの言語変化の要因として、先にことばの内部事情を挙げた。これについても考えてみたい。

2-2-2.で取り上げた一段活用動詞のラ行五段化傾向は、動詞の一段活用から(ラ行)五段活用への変化であり、この変化が完成すると、複数ある動詞の活用形は五段活用のみになる(ナ変、カ変は限られた語数なので、例外扱いすれば良い)。現在、動詞の中で主流を占める五段活用への「類推」が働いた結果、このよう

な変化が起こったとも言えるが、先に述べたように音声的な安定感を求めた結果とも言える。おそらく、この両方の動機が重なって、お互いを促進させたのではないかと考える。

今回の結果から考えると、2拍以上の一段動詞であっても否定形が「～ラン」になるという変化が、九州南西部から大分県の方へ及んでいるようである(表1参照)。方言イメージのアンケート結果では、これらの地域はあまり関心を持たれていなかった。好感度も、福岡や関西地方に比べて低かった。しかしながら、ことばの内部事情—動詞の活用形を五段活用に統合する—によって変化が起こる場合、社会規範意識が強く働かない地域(都市に対する地方)から、同時発生的に、つまり各地で並行して新しい現象が進行することがある。大分県内でも、特にどこからという意識がなく、いつのまにか白らも使っているということではないだろうか。こういった変化もまた存在する。

4-3. まとめ

先述のように、今回調査したジャからヤへの変化は子音弱化という、発話時に労力を使わない方に変化するという法則にのっとった変化である。しかも、これらの変化に対し、大分県方言話者の中に「これは都市(大分、福岡、大阪、東京、全国共通語などいずれかの都市)のことばだ」という意識が働いたことが重要である。その伝播は都市の威信・威力によって大いに推進されるからである。実際に、ジャからヤへの変化はもう完了したと言っても良いかもしれない。県内出身者全体の約86%(210/244人)が「ジャを使わない」と答え、「ヤは大分のことば」という意識の人も81.6%(199/244)人いるのである。わずかに数十年のうちに、ジャはヤに取って代わられることになったのである。3.の方言イメージの章で明らかにしたように、関西弁への憧れとも言える好感度の高さが支援して、そこから発した断定辞ヤが大分県方言に受け入れられ、広まり定着していることがわかる。

一方、一段活用する動詞のラ行五段化傾向は、

動詞の活用の種類を減らすという、文法体系全体にまで及ぶ大規模な変化につながっている。こちらは文法を操る頭の整理時における簡略さが、これまでの文法規範を覆そうとしているわけである。この変化は大分県方言話者が都市と意識している地域からのものではなく、小林隆(1995)によれば、近くは九州南西部、遠くは沖縄や東海、上越といった地域で同時並行的に起こっている。今回の調査でも、県外出身者の中で九州南西部出身者に、2拍以上の一段動詞の場合も「～ラン」となる割合が高かった。この変化は、都市の威信・威力を借りてはおらず、言うなれば体系全体の変化の要求を受けて進行していると考えられる。つまり、ことばの内部事情による変化なのである。こういった変化の場合、都市を中心とする集団的分布も起こらない。変化の理由・伝播の仕方がジャからヤへの変化とは異なる、このような変化も存在する。

ラレル敬語については、敬語のために別の語彙を使わなければならない手間を省け、動詞のいわゆる未然形にラレルを添加するだけで良いという手軽さゆえに広まりつつあるし、進行していくと思われる。現時点では、ラレル敬語の学生使用率は28%ほどであるが、日高(1996)にもあるように、大分県内の病院や接客の場でよく聞かれる言葉遣いである。どこの言葉かという問いに25.9%が地元大分であると答えた。しかし一方で、福岡や大阪、東京、共通語などという回答も合わせると25.4%もあった。この変化は、方言表現の中に敬語が乏しいとされる大分県ならではの新しい敬語表現のように思えるが、形式としては古いものであるから、再伝播とも考えられる。近隣の熊本・宮崎・福岡などの一部からの伝播が考えられるが、学生の意識の中には大阪や東京、共通語などの大都市の言葉遣いだという意識が存在することがわかる。今回の結果から推測できることは、簡単に使える敬語として、日本全体の敬語簡素化の流れや商業敬語などとも呼応していたことが、大分県内での使用も促進することになったのではないかということである。一部の人は、常

日頃から注目している福岡・大阪・東京などの人々の言葉からラレル敬語を聞いて、「都市のことば」として使い始めたのである。こう考えると、ラレル敬語については、煩雑な敬語語彙の使用を簡素化しようということば内部の事情による変化が、都市の威信・威力を借りて推進されているということが言えるのではないだろうか。

5. おわりに

以上から、ことばの変化が進む際には、その地域の話者の方言イメージも強く関与していることが多い、ということが言えるであろう。その変化が大都市からの伝播であれば、大都市への好意と相まって伝播は推進される。大分県方言話者にとっては、福岡(とくに博多区)や関西(とくに大阪府)がそのような都市である。また、実際には大都市から発信された変化でないとしても、大都市からの発信のように思い得る要素があれば、学生たちは積極的に都市からの変化と思いきんで取り入れるようだ。それくらい、福岡や関西の威信・威力は大きいのである。しかし、ことば内部の要請による大規模な変化の場合は都市の威信・威力とはあまり関係なく、むしろ大都市以外から発信され、広がることもある。

現在の県には、外部からの強制的な方言使用禁止の圧力などは存在しない。したがってことば内部の事情による変化と福岡・関西から発信されることば(の変化)、そしてそれらと現在の県方言が関係して生じる言語現象が、「新しい大分県方言」として広まっていくことが予想できる。

注1 方言意識と方言イメージという術語は、ほぼ同義に使われることが多い。その方言に対する漠然とした感じも回答の中に含まれることを考えると、「意識」より「イメージ」のほうが適当である。

注2 井上史雄(1998)によると、「ヤ」は「赤や黄色」、「もういいや」、「かわいや、かわいや」、

「ありやなしや」など、古くから現代までよく使われてきた形式であり、その覚え易さ、使いやすさゆえに近畿地方で安定して使われ、九州地方でも取り入れられたという説明が一番説得力があるということである。同時に、現在「ダ」を使う東日本と山陰地方では、過去にも「ジャ」が使われることがなかったらしい。つまり「ジャ」から「ヤ」が生まれたが、「ダ」は「ジャ」から生まれた形式ではない（「ダ」も「ジャ」も「デアル」の変形「デア」からさらに変化したもの。一方で「ダ」に変化し、他方で「ジャ」に変化したと考えるのが一般的になっている）ので、「ジャ」を使っていた大分県方言では、「ヤ」へと変化していくのも不思議ではないという主旨。また、陣内正敬関西学院大学教授の報告「西日本におけるネオ方言の実態に関する調査研究」（代表＝真田信治大阪大学教授）の一部では、九州方言に関西独特の言い回しが浸透し、東京の言葉よりも関西弁を好む傾向がはっきり出たとある。（朝日新聞1998.08.）

注3 やがて、使役形が「ーラセル」：例えば「寝る」であればネラセル、連用形が「ーリ Chol・ヨル、ーリタイ」：同じく「寝る」であればネリ Chol・ネリヨル、ネリタイとして変化・定着すれば、動詞の一段活用は消滅して、ラ行五段活用の中に統合されることになるのである。

注4 なぜ、この2つの動詞が多いかについては、未調査。おそらく、日常の使用頻度の高さが原因と思われる。

注5 活用形の中で、否定形（～ナイにあたる形式）が最も五段化しやすいとされているからである。

注6 「その他」では、他に「病院」1人（県内杵築市出身者）、「沖繩」1人（県内国見町出身者）があり、ちなみに無記入（地域の指定を書かなかったもの。「どこかわからない」に等しいかもしれない。）は、69人であった。ところで、ラレル敬語は、今後ますます盛んになるであろうと考えられるが、障害もないわけではない。それは、「誰かに見ラレている」、「いきなり来ラレルと困る」、「いやがらせをさしています」などの、受け身表現（特に「迷惑の受け身」）とラレル敬語の形式が同形なことである。古くは受け身表

現であるがゆえに、その間接的な点が尊敬の表現に好まれ取り入れられたという経緯はあるが、現代にはその意識は受け継がれていない。それゆえに受け身形と同形であることが、今後のラレル敬語の広まりにどれだけの障害になるのかは、興味深いところである。

【附記】

今回のアンケート調査は、'97年度・'98年度の別府大学短期大学の学生の皆さんに行ったものです。アンケートに協力してくださった皆さんにこの場を借りて心より感謝致します。

また、初等教育科の'98年度の調査に関しては、生活文化科の井尾先生の好意により、アンケートを行うことができました。記して感謝いたします。

【おもな参考文献】

- 『大分県史 方言篇』大分県総務部総務課編（1991）大分県
- 『大分方言30年の変容』松田正義・日高貢一郎著（1996）明治書院
- 『大分県の方言』糸井寛一（1983）『講座方言学9』所収図書刊行会
- 『言葉づかい新風景（方言と敬語）』井上史雄著（1988）秋山書店
- 『社会言語学』真田信治・渋谷勝己・陣内正敬・杉戸清樹著（1992）おうふう
- 『昭和日本語方言の総合的研究 第一巻 方言敬語法の研究』藤原与一（1978）春陽堂書店
- 『地方中核都市方言の行方』（地域語の生態シリーズ九州篇）陣内正敬著（1996）おうふう
- 『東京語のゆくえ』國學院大学日本文化研究所編（1996）東京堂出版
- 『方言主流社会』（地域語の生態シリーズ東北篇）佐藤和之著（1996）おうふう
- 「「～されてください」考
一大分県での実態を中心に」日高貢一郎（1996）『日本語研究諸領域の視点』所収
- 『動詞活用におけるラ行五段化傾向の地理的分布』小林隆（1995）東北大学文学部研究年報 第45号
- 「西日本方言の変容と関西方言」陣内正敬（1996）『方言の現在』所収明治書院